

神とあなたの間には ただ愛だけが  
地とあなたの間には 不信と不安が  
罪とあなたの間には 憎悪と戦いが  
そして天とあなたの間には 希望が  
夜の明けそめるまで続くだろう

ヘルフデのメヒティルト  
1277年

## ■自己弁護についての訓練(1/3)

だれも私のことを思って心を痛めない。

(1サムエル 22:8)

これは王たる者の語ったことばである。だれが、このような状態を想像することができようか。一国の最高の権威を持つ者が自己をあわれみ、君主たる者が自分を見じめな卑賤な者とし、王冠をいただく者がむずかる幼児のように泣き叫ぶ！ しかし、これがイスラエル初代の王であったサウルの実情であり、サウルの性格を余すところなく浮き出させている。

サウルが即位して王権を振るうようになったときは、利己心や自己憐憫などは、彼の性格の中で目だつようなことはなかったと思われる。むしろ反対に、賞賛に値するような幾つかの特長を備えてさえいた。彼は裕福な家の出身であり(1サムエル 9:1)、忠実で、「美しい若い男で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいない」とさえ言われていた(2節)。背が高く、りっぱで、有能で、協力的であり、まことに神の民の上に立つ者としてふさわしい資格を備えていた(16節)。その上、物腰の柔らかい謙遜な人であった。王となるべき油注ぎを受けたことを、親族に向かって誇ろうとはしなかったし(10:14-16)、サムエルが彼を王として公に宣言しようとしたときに、「彼は荷物の間に隠れて」いたほどである(22節)。

また、自分を批判する者たち(年若くして権威ある座についた者が、いやというほど多くの嘲笑者を敵に回さなければならないのは世の常である)に対して、口答えしようとはしなかった。「よこしまな者たちは、『この者がどうしてわれわれを救えよう。』と言って軽蔑し、彼に贈り物を持って来なかった。しかしサウルは黙っ

ていた」(27節)。これは実にりっぱな態度である。悪意に満ちた非情な人々からあざけられ、ののしられているときに、じっとこらえているためには、よほど強い性格と、神に対する信頼感がなければならない。人々はサウルがまだその才能を発揮しないうちに、彼をさばいてしまったのであるが、それでも彼は、りっぱな態度でその場をやり過ごすことができた。

いよいよ自分の本領を発揮すべき時がやって来ると、サウルは指導者としての実力をあらわし(11:4-11)、彼の統率した軍隊は大勝利を収めることができた。その上、兵士たちが先の批判者たちを殺してしまいたいと言い出したとき、「きょうは人を殺してはならない。きょう、主がイスラエルを救ってくださったのだから」と言って、その寛大さを示すことができた(13節)。これは王たる者にふさわしいことばであり、彼がいかにもすぐれていたかを示すものである。

ところが、サウルの人格や性格に欠点が目だつようになってきた。それは、もし彼が真によき王としてその地位にとどまろうとするなら、どうしても完全に捨ててしまわなければならないような欠点であった。彼は家庭で受けたしつけにもかかわらず(あるいは、そのしつけのためかもしれない)、またサムエルの手によって神の油注ぎを受けたにもかかわらず、霊的なことについての感覚に乏しかったようである。口では神に信頼すると言いながら、その心は世俗的なことで満ちていた。彼は自分かってであり、また衝動的で性急であったため、サムエルが彼の部隊に到着するのが遅いと思われたとき、自分で全焼のいけにえをささげてしまったのである。これは、祭司以外の者がしてはならないことであった。このことは、私たちにとってはそれほどたいした問題であるとも思えない。というのは、私たちはユダヤ人のささげものに関する儀式について知らず、祭壇と犠牲の冒すべからざる絶対的神聖さを深く理解していないからである。神に関することについてサウルがこれほど浅薄な考え方しかしていないことを知ったサムエルは、彼が王としての根本的な資格に欠けていることを認めないわけにはゆかなかった(13:13, 14)。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第八章「自己弁護についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。